

ける所にてよめる、

去るめ

いのちだに心にかなふ物ならば何か別のかなしからまし

やまざきより神なびのもりまでをくりりに人々まかりて、かへりがてにして、別れおしみけるによめる、

源さね

人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりなん○中略

藤原のこれをかゝむさしのすけにまかりける時に、をくりにあふさかをこゆとてよみける

つらゆき

かつこえて別もゆくか相坂は人だのめなるなにこそ有けれ

〔土佐日記〕九日○承平五年正月のつとめて、おほみなとより、なはのとまりをおほんとして、こぎいでにけり、

これたがひにくにのさかひのうちはとて、見おくりにくる人、あまたがなかに、ふぢはらのとさぎね、たちばなのすゑひら、はせべのゆきまさらなん、みたちよりいでたうびし日より、こゝかしこにおひくる、この人々ぞ心ざしある人なりける、この人びとのふかき心ざしは、この海にはをとらざるべし、これよりいまはこぎはなれてゆく、これをみくらんとてぞ、この人どもはおひきける、かくてこぎゆくまに、海のほとりにとまる人もとをくなりぬ、ふねの人も見えずなりぬ、きしにもいふことあるべし、船にもおもふことあれどかひなし、かゝれど、この歌をひとりごとにしてやみぬ、

おもひやる心はうみをわたれどもふみしなれば去らずやありけん

〔千載和歌集七 離別〕源惟盛としごろ侍物にて、箏のことなどをしへ侍けるを、土佐國にまかりける

時、かはじりまで、送りにまうできたりけるに、蒼海波の秘曲のことちたつることをしへ侍て、そのよしの譜かきて給うとて、奥に書付て侍ける
入道前太政大臣